

研修医・指導医リレーエッセー^{②④}

指導医から受け取ったもの

水島協同病院 指導医 宗兼 麻美

私が初期研修1年目の頃、院内の看護師さんで、よくPSVTを起こして救急外来を受診する方がおられました。特にストレスの多い4～5月には、何度も救急外来に呼ばれて行き、その方への対応を通じて抗不整脈薬の使い方を覚えさせていただいたようなものでした。はじめて一人で対応をすることになった時のことです。アデホスを使っても止まらない、ワソランを使っても止まらない。むしろ心拍数は上がって苦しそうにしている、どうしよう…と焦っていると、指導医の先生がタイミングよく現れ、ポケットから飴を出して『舐められ』と手渡しました。飴を受け取ると、すーっと嘘のように発作が止まり、私に向かって『愛が足らんよ、愛が』とけろりと言ったのでした。笑い話の一つではありますが、改めて今、患者さんと接するときの基本は、一対一の心あるやり取りであると実感します。

実用的なアドバイスとしては、『他人を信用してはいけない』というお言葉もいただきました。上級医の言うことであってもそのまま鵜呑みにしてはいけない、という教えだったと記憶しています。ただのめまいだから治ったら帰していいよ、いつも胸が痛いと言ってくる患者さんだから…こんな言葉で引き継ぎを受けて、自分で十分に診察することを怠ったことで、苦い経験をしたことが何度かあります。患者と自分を守る大事な教えとして、臨床経験の中で折に触れて思い出してきました。

指導医と呼ばれる立場になってみて、いかに自分が寛容に育ててもらっていたのかを実感します。言わなくてもいいことを取って言葉にして伝えてくださることは、本当にありがたいことで、これらの言葉をくださった先生とは1年で離れることになりましたが、先生からいただいた言葉は、苦しい時に何度も自分を励ましてくれました。

研修制度の変化により、研修医は複数の病院を流動的に移動するようになりました。また、人口減少、高齢化社会といった社会の変化により病院のあり方が変わることで、研修内容も影響を受けていると感じます。変化の中でも、水島協同病院では私が研修医のころから、自ら考える力を養う教育が行われていました。その姿勢を伝えられるようにしたいと思うし、研修医が安心感をもって自己研鑽できる環境をつくりたいと思います。

研修医1年目は、社会人になりたてということもあり、特にストレスの多い一年であると思います。自分自身、初めての経験の連続で、自分ができると思っていたことが出来なかったり、未熟な自分に何度も気づいて落ち込んでいました。それでも、ダメな自分に出会う時が、成長の機会なのだと思います。苦手だと思っていたことが強みに変わっていくこともあります。いろいろなことに安心して挑戦できる環境を全力でサポートするので、日頃の診察手技や、学会発表などを含めいろいろなことを経験して、医者は同期から院長まで、またコメディカルの方々を含め、ぜひ周りを頼ってほしいと願います。



医師臨床研修センターでは毎年1月、来年度採用の初期研修医の医師国家試験合格祈願のため倉敷の阿智神社へ。右から2人目が筆者